

核兵器の在り方を語る上で、ウクライナ危機以前と以後に分けられる。それくらい今回の侵攻は日本国民に大きな衝撃を与えました。

特に、ウクライナが核兵器の所持を放棄していたことから、「ウクライナが核兵器さえ持っていれば侵攻は防げたのではないか」「日本も核を持つべきだ」といった考えを持つ日本国民も増えたことでしょう。

日本も核を持つべきだと主張する人々は、自分たちをリアリストだと思ってそれを主張しています。なので、彼らにいくら広島や長崎の被害を訴えたとしても意味はありません。むしろ、広島や長崎のような被害を出さないためにも核を持つべきだと主張してくるからです。

今回のウクライナ危機で、核を持つべきだというリアリストと、核は良くないという理想論が対立して、分断する形となってしまいました。このまま核を持つべきだという意見が広まれば、実際に日本が核を持つ未来が実現してしまうかもしれません。

この分断を解消するためには「核を持たないことこそがリアリズムである」と核廃絶派が主張する必要があるのではないのでしょうか。

核を持たないリアリズムは、ミクロとマクロの2つの視点で語るができます。

◎日本という国家の視点（ミクロ）

ミクロな視点で見れば、日本が核を持つことによるデメリット、核を持たないことのメリットを考える必要があります。核を持つことの最大のデメリットは、国際社会からの信用を失うことでしょう。

日本が独自で核を持てば明確な核拡散防止条約（NPT）違反となり、日米同盟をはじめとして多くの同盟関係を破綻に追い込みます。

世界からの経済制裁によって国力も落ちて、同盟関係の破綻で防衛力も落ちるので、日本にとってのデメリットが大きすぎるのです。世界の核軍縮の方向性から逆行するわけにはいかないでしょう。

核保有は難しいから核共有を議論するべきだと言う人たちもいますが、核共有はアメリカが核の決定権を持っているため、現状の核の傘に比べて何のメリットもないでしょう。仮に核を使うなら、日本国内に核を置く必要などなく、アメリカから ICBM や SLBM などを発射することになるからです。

NPT 体制が確立してから核共有を行った国もありませんし、国際的なハレーションを起こす必要はないでしょう。

◎世界の視点（マクロ）

では、マクロの視点で見て、なぜ世界的に核を減らしていかないといけないのでしょうか。それは、核を持つ国が増えれば増えるほど、核戦争の危険性が高まるからです。

核を持つことこそがリアリズムだと考えている人たちは、核をお互いに持っていれば、お互いに抑止力が働き、相手の反撃を恐れて核をうつことができなくなると考えています。この理論が正しければ、すべての国が核を持つことで、お互いに核をうてないことになります。

これは一見、正しいように思えますが、大前提となる条件があります。それは、「指導者にまともな判断能力があること」です。核を持つ国が多くなればなるほど、反撃のことなど考えずに核を放つという判断をする指導者が出てくる可能性が高くなります。そして、一度核が放たれてしまえば、お互いが被害を最小限に抑えるべく核を撃ち合うようになってしまうでしょう。

他にも、「核を持つ国が増えれば、どこが核攻撃してきたかわかりにくくなる」「機械のエラーもあり得る」など、やはり核を持つ国が増えるほど核戦争の可能性はどんどん上がっていくのです。

現状の NPT は、アメリカ・フランス・イギリス・ロシア・中国の 5 カ国だけに核の保有を認める不公平な制度です。しかし、それ以上核を広めずに核のリスクを最小限に抑えるためには仕方ない苦肉の策とも言えます。

もちろん、今後この不公平性は解消していく必要がありますが、それは他国が核を持つことで解消するのではなく、世界から核をなくしていく方向で解消すべきなのです。

ウクライナ危機によって、核保有に対して前向きになった人もいるでしょう。しかし、日本は被爆国として、核廃絶に前向きな国として国際的にアピールすることが、国益にも平和にも繋がるはずですが。

「核を持つことのリアリズム」に対しては、「核を持たないことのリアリズム」をぶつけることで、核廃絶の未来に繋がっていくのではないのでしょうか。